

「食物アレルギーを有する乳幼児を養育する母親の食物アレルギー対応力に関する研究」

本研究の目的は、第一に食物アレルギー乳幼児を養育する母親の食物アレルギー対応力の尺度を作成すること、第二に食物アレルギー乳幼児を養育する母親の食物アレルギー対応力と関連要因を明らかにすること、第三に子どもの食物アレルギーの有無による母親の WHOQOL26 の QOL と関連要因を明らかにすることである。そして、食物アレルギー乳幼児を養育する母親の食物アレルギー対応力の向上に向けた支援のあり方を提言することとした。

序論で、問題の所在と背景を示し、研究目的、論文の構成、用語の定義について述べた。

第 I 章は、わが国における食物アレルギー乳幼児の母親の現状と看護の課題を明確にするために、1990～2009 年の 20 年間の文献を考究した。15 件を分析対象とした結果、食物アレルギー乳幼児の母親は「除去食遂行の負担・困難感」、「安全への不安」、「疾患治癒の不安」、「成長発達の不安」、「栄養の不安」、「疲労」、「育児ストレス」、「生活調整の負担」を抱え、それらに対応しながら生活していた。食物アレルギー乳幼児の母親の QOL の低下を指摘した 2 件の研究は信頼性・妥当性のある評価票を用いたものではなく、母親の食物アレルギー対応力を調査した研究は見当たらなかった。食物アレルギー乳幼児の母親に対する看護実践に言及した文献は事例検討だった。信頼性・妥当性の検討された評価尺度による母親の対応力や QOL の実態、および関連要因について明らかにする必要がある。

第 II 章は、食物アレルギー乳幼児を養育する母親を対象に無記名自記式質問紙調査を行い、食物アレルギー対応力を測定する尺度の作成を目的とした。食物アレルギー乳幼児を養育する母親 280 名を対象に因子分析の結果、「ストレス対処」3 項目、「除去食技術」4 項目、「医療者からの情報収集」3 項目、「食物アレルギーの知識」5 項目、「夫の協働」2 項目の 5 因子 17 項目で構成される「食物アレルギー対応力尺度」が作成され、その信頼性と妥当性が確認された。

第 III 章は、第 II 章の母親 280 名を対象に、食物アレルギー乳幼児を養育する母親の食物アレルギー対応力の実態と関連要因を検討した。その結果、食物アレルギー対応力は、母親および家族の健康状態、除去品目、除去品目数、アナフィラキシー経験、受診施設、育児ストレス、育児以外の生活全般上のストレス、子どもを連れて出かける不自由に関連していた。食物アレルギー対応力は、母親の健康状態、家族の健康状態、育児以外の生活全般上のストレスと共に QOL の予測因子であることが明らかとなった。また、約 4 割の母親が看護師からサポートを受けていると捉えていた。母親の食物アレルギー対応力を診断後早期のうちに向上させる必要がある。

第 IV 章は、子どもの食物アレルギーの有無による母親の WHOQOL26 の QOL と関連要因を明らかにすることを目的とし、食物アレルギー乳幼児を養育する母親 280 名、食物アレルギーを有さない乳幼児を養育する母親 187 名を分析対象とした。その結果、食物アレルギー乳幼児の母親の QOL は、そうでない乳幼児の母親の QOL と差がなかった。食物アレルギー乳幼児を養育する母親の QOL には母親自身・食物アレルギー乳幼児・家族の健康状態、育児ストレス、育児以外の生活全般上のストレス等が関連していた。母親が食物アレルギーと共にある生活に前向きに取り組み、対応力を高められるよう、母親のストレスや家族も含めた健康状態にも配慮しながら支援する必要性が示唆された。

総括では、第 I 章から第 IV 章の結果から、食物アレルギー乳幼児の母親の食物アレルギー対応力向上に向けた支援のあり方を提言した。食物アレルギー乳幼児を養育する母親の食物アレルギー対応力の向上には、チーム医療が欠かせない。母親自身のストレスコントロール、食物アレルギーの正しい理解、除去食療法の正しい理解と技術の習得、夫の協働、自身と家族の健康が維持できるよう、医師、看護師、栄養士、臨床心理士など多職種が連携し、支援することが大切である。本研究の限界として対象者が食物アレルギーのコントロール状況が安定した集団であったこと、今後の課題として、一般的な食物アレルギー乳幼児の母親の対応力の実態と、食物アレルギー乳幼児の母親に対する看護師の認識や実践を明らかにし、食物アレルギー乳幼児の母親の対応力の向上に対する看護ケアモデルの考案が必要である。